

日本語構造伝達文法の中国語への適用

— 予備的考察 —

蒋 家 義

要 旨

本稿は「日本語構造伝達文法の中国語への適用」という研究の予備的考察である。予備的考察として、主に、文法研究に関する基本的な考え方や立場、これから行おうとする研究の目的と対象、日本語構造伝達文法の基礎等を述べた。具体的に言えば、まずは、文を考察するために、深層格、表層格、文の成分、「主題－解説」構造といった文の四つのレベルを区別する必要性を主張した。次に、中国語の文の研究でよく利用されてきた符号図示法、枠式図示法、黎錦熙の図示法を検討した。さらに、研究の基本的立場、目的、考察対象等を述べた。最後に、日本語構造伝達文法の基礎、即ち構造モデルと時空モデルについて論じた。

キーワード：文の四つのレベル、文の図示法、日本語構造伝達文法、構造モデル、時空モデル

1 はじめに

本稿は「日本語構造伝達文法の中国語への適用」という研究の予備的考察である。2節では、文の四つのレベルについて述べる。3節では、中国語の文の図示法を検討する。4節では、研究の基本的立場、目的、考察対象等を述べる。5節では、日本語構造伝達文法の基礎について論じる。

2 文の四つのレベル¹

一つの文を考察するにあたって、まずは四つのレベルを区別することが必要である。

2.1 第一のレベル (深層格)

第一のレベルは、(1) に示されるように、文の中にある名詞、代名詞等と動詞等との様々な意味関係で、格文法でいう深層格にあたるものである。(1) では、名詞「花子」、「パスタ」と動詞「食べる」が次の意味関係にある：「花子」が「食べる」の表す動作の主体 (動作主) で、「パスタ」が「食べる」の表す動作の対象である。

- (1) 花子が パスタを 食べた。
動作主 対象

動作主、対象の他には、道具、場所、出発点等の意味関係がある。

2.2 第二のレベル (表層格)

第二のレベルは、名詞、代名詞等と動詞等との様々な意味関係を示す諸形式で構成されるが、これは格文法でいう表層格にあたるものである。(2) では、格助詞「が」が動作主という意味関係を示し、格助詞「を」が対象という意味関係を示している。このような格助詞「が」と「を」はそれぞれ「が格」と「を格」と呼ばれている。

- (2) 花子が パスタを 食べた。
が格 を格

「が格」、「を格」の他には、「で格」、「に格」、「から格」等の表層格がある。

深層格 (意味関係) と表層格は一对一の関係にあるわけではない。例えば、(3) では、動作主という意味関係が「が格」、または「に格」によって示され、対象という意味関係が「を格」、または「が格」によって示されている。

- (3) a 太郎が 次郎を 殴った。
動作主 対象 ←深層格
が格 を格 ←表層格
- b 次郎が 太郎に 殴られた。
対象 動作主 ←深層格
が格 に格 ←表層格

ちなみに、意味関係を示す形式や方法には、日本語の格助詞のような後置詞の他に、ラテン語や古代ギリシア語に見られる語形変化、中国語の“介詞”のような前置詞、語順等がある。

¹ これから述べようとする内容に関しては、村木 (1991 : 137-142, 175-176) と角田 (2009 : 177-239) に負うところが大きい。本稿の第一のレベル (深層格)、第二のレベル (表層格)、第三のレベル (文の成分)、第四のレベル (「主題-解説」構造) はそれぞれ、村木 (1991) の提示した意味統語論的なレベル、形態統語論的なレベル、機能統語論的なレベル、通達統語論的なレベルにあたり、角田 (2009) の提示した意味役割のレベル、格のレベル、統語機能のレベル、情報構造のレベルにあたる。

² 文の成分の分類は渡辺 (1971 : 745) による。

2.3 第三のレベル (文の成分)

続いて、第三のレベルは、(4) に示されるように、主語、述語、修飾語、並立語、接続語、独立語等、いわゆる文の成分²のレベルである。

- (4) 花子が パスタを 食べた。
 主語 修飾語 述語

2.2節で述べたように、深層格と表層格は一对一の関係にはない。同様に、深層格と文の成分、及び表層格と文の成分も一对一の関係にはない。例えば、(5) では、動作主という意味関係を持つ名詞(太郎)が主語、または修飾語になっており、対象という意味関係を持つ名詞(次郎)が修飾語、または主語になっており、修飾語としての名詞が「を格」、または「に格」を取っている。

- (5) a 太郎が 次郎を 殴った。
 動作主 対象 ←深層格
 が格 を格 ←表層格
 主語 修飾語 述語 ←文の成分
- b 次郎が 太郎に 殴られた。
 対象 動作主 ←深層格
 が格 に格 ←表層格
 主語 修飾語 述語 ←文の成分

なお、(5) における「が格」を取っている名詞「太郎」と「次郎」は主語になっているが、次の(6) に示されるように、「が格」を取っている名詞「花子」と「パスタ」はそれぞれ主語と修飾語になっている。即ち「が格=主語」のような対応関係も見られるが、総じて言えば、表層格と文の成分は一对一の関係にあるわけではない。

- (6) 花子が パスタが 大好きだ。
 が格 が格 ←表層格
 主語 修飾語 ←文の成分

2.4 第四のレベル (「主題-解説」構造)

第四のレベルは、(7) に示されるように、「主題-解説」構造である。主題は文の中で、文が何について述べるのかを示す部分で、解説は主題について述べる部分である。旧情報・新情報の視点から見れば、主題は常に既知の旧情報で、解説は常に未知の新情報である。

- (7) 花子は パスタを食べた。
 主題 (旧情報) 解説 (新情報)

日本語では、助詞「は」が主題を表す典型的な助詞である。中国語には、“语气助词”や“介词”、ポーズ等、主題を表すいくつかの形式や方法がある。

2.2と2.3節で、深層格、表層格、文の成分の間には、一对一の関係が存在しない

と述べた。「主題－解説」構造は深層格、表層格、文の成分のいずれとも一対一の関係にはない。例えば、(8)では、動作主、または対象という意味関係(深層格)を持つ名詞がそれぞれ主題になることができるし、「が格」、または「を格」(表層格)を取った名詞がそれぞれ主題になることができる。さらに、主語、または修飾語(文の成分)としての名詞もそれぞれ主題になることができる。

(8) a	花子は	パスタを	食べた。	
	動作主	対象		←深層格
	(が格)	を格		←表層格
	主語	修飾語	述語	←文の成分
	主題	解説		←「主題－解説」構造
b	パスタは	花子が	食べた。	
	対象	動作主		←深層格
	(を格)	が格		←表層格
	修飾語	主語	述語	←文の成分
	主題	解説		←「主題－解説」構造

以上のように、一つの文は四つのレベルに分けて考察することができる。第一のレベル(深層格)、第二のレベル(表層格)、第三のレベル(文の成分)、第四のレベル(「主題－解説」構造)はそれぞれ、意味、形態、統語、語用といった、文の異なった側面を扱っているものと考えられる。

2.5 「三つの次元」理論と中国語の表層格

中国語学では、1980年代に胡裕樹、張斌、范曉らによって提唱された“三个平面理论”(「三つの次元」理論)³が有名である。この理論の核心は文法分析にあたって、統語、意味、語用といった異なった次元を区別すべきであり、また、それらを互いに結び付けるべきでもあるという観点にある。「三つの次元」理論は1990年代に大きな展開を遂げ、現在ではいわゆる“三维语法”(三次元文法)に発展してきた。ただ、「三つの次元」理論、及び三次元文法は本稿で提示した第二のレベル(表層格)⁴を扱っていない。これには、次のような原因があると考えられる。

第一に、中国語に厳密な意味での語形変化がないという事実、及び、表層格は語形変化を持つ屈折語の文法カテゴリーであるという観念から、中国語にはその文法カテゴリーは存在しないと考える研究者が少なくない。このため、表層格よりも、深層格、即ち意味関係の研究が重視されている。

³ 詳しくは陳(2002: 353-375)を参照されたい。

⁴ 注1を参照。

第二に、中国語の表層格表示が同質性に欠けていることがある。中国語の表層格表示は(生成文法の格理論の用語を援用して言えば)無標の抽象格⁵と、有標的な前置詞等によって担われている数多くの形態格の二種に分けられる。抽象格はしばしば動作主や対象の意味関係を示しており(次の(9)を参照)、形態格は動作主や対象を含めて様々な意味関係を示している。しかも、形態格の量がかなり多い。前置詞に限って言えば、格に関わる典型的な前置詞は50個余りある(金 1996: 81-82、張 2000: 126-127を参照)。例えば、(受身文における)動作主を示す“被、叫、让、给”、対象を示す“把、将、管”、仲間を示す“和、跟、同”、場所を示す“在、于、距”、出発点を示す“自、从、由”等々である。

- (9) a 太郎 太郎 打了 殴った 次郎 次郎。(太郎が次郎を殴った。)
 動作主 対象 ←深層格
 抽象格 抽象格 ←表層格
- b 太郎 太郎 把 前置詞 次郎 次郎 打了 殴った。(太郎が次郎を殴った。)
 動作主 対象 ←深層格
 抽象格 “把”格 ←表層格
- c 次郎 次郎 被 前置詞 太郎 太郎 打了 殴った。(次郎が太郎に殴られた。)
 対象 動作主 ←深層格
 抽象格 “被”格 ←表層格

筆者は語形変化だけではなく、前置詞や後置詞、語順も深層格を示す形式と方法であり、なお、深層格をより効果的に分析するために、それを示す表層の形式と方法をも考察しなければならないと考えている。それで、本稿では、中国語での表層格の存在を認め、中国語の文に関しても四つのレベルを区別しておく。

3 中国語の文の分析図示法

中国語の文の分析に関しては、以下に述べるいくつかの図示法——文成分分析法で使われる符号図示法、直接構成素分析法で使われる枠式図示法、及び黎錦熙の図示法——が特定の言語理論に限られることなく、よく利用されてきた。

3.1 文成分分析法で使われる図示法

“句子成分分析法”(文成分分析法)は文の分析法の一つで、文の成分を確認することによって、文の構成を分析するものである。文の成分を確認するには、主語部分全体(“主語部分”)における主語、述語部分全体(“谓語部分”)における述語、目的語(“宾语”)に対する述語動詞、連体修飾語(“定语”)や連用修飾語(“状語”)に対する被修

⁵ 無標の抽象格の代わりに、語順によって表されているとも考えられる。Blake (2001: 14-15)を参照。

飾語（“中心語”）、補語（“補語”）に対する述語動詞や述語形容詞等、いわゆる中心語（“中心詞”）を見出さなければならない。従って、文成分分析法は“中心詞分析法”（中心語分析法）とも呼ばれている。

文成分分析法において使われる図示法では、(10)のように“||”（縦二重線）で主語部分全体と述語部分全体との境界を示し、“_____”（二重下線）で主語を示し、“_____”（一重下線）で述語を示し、“_____”（波線）で目的語を示し、“()”（丸括弧）で連体修飾語を示し、“[]”（角括弧）で連用修飾語を示し、“< >”（突起括弧）で補語を示している。

- (10) 花子 || [每周] [在西餐厅] 吃 <一次> (日式) 意大利面。
花子 毎週 レストランで 食べる 一回 和風 パスタ
(花子は週一回、レストランで和風パスタを食べている。)

こうした図示法は多くの符号を用いるので、“符号図解法”（符号図示法）と呼ばれている。なお、研究者によって、文の成分を示す符号がかなり変わることもある。例えば、劉・潘・故（2001：23）は“_____”で述語を示し、“_____”で目的語を示し、“< >”で連用修飾語を示し、“[]”で補語を示している（次の(11)を参照）。

- (11) 花子 || <每周> <在西餐厅> 吃 [一次] (日式) 意大利面。

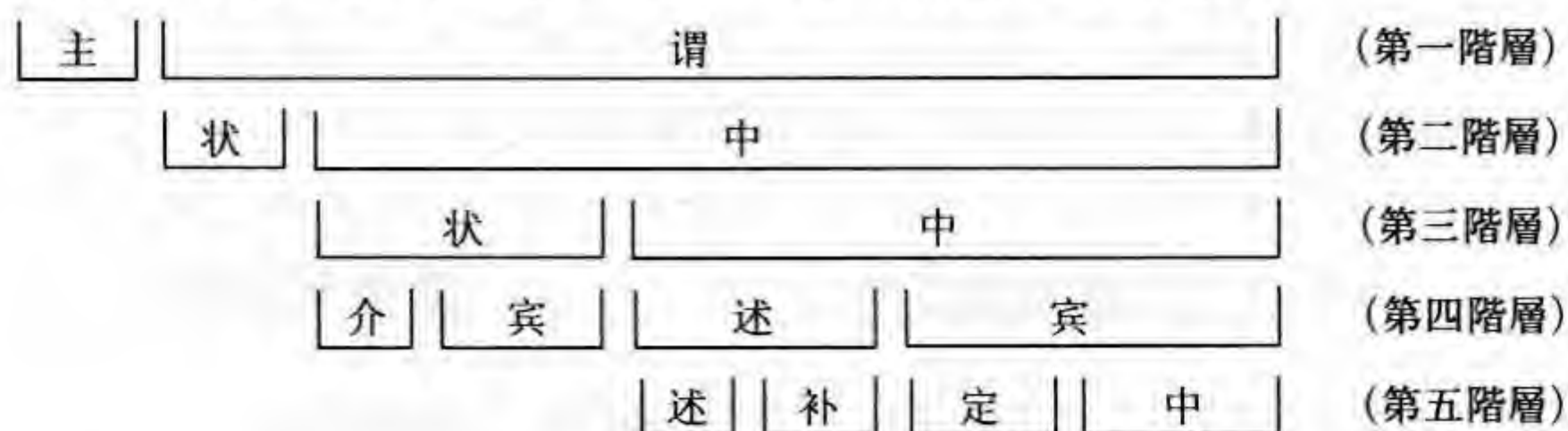
3.2 直接構成素分析法で使われる図示法

“層次分析法”（“直接成分分析法”とも呼ばれている。即ち、直接構成素分析法のことである）はよく使われてきた文の分析法であり、符号図示法より文の階層性を重視している。直接構成素分析法は文全体を二つの大きな直接構成素に分けて両者の関係を確認して、その二つの直接構成素をそれぞれまた二つの小さな直接構成素に分けて両者の関係を確認して、……、というふうに繰り返すことによって、文の構成を分析するものである。

例えば、(11)の文は(12)のようにまず、“主謂”（主語部分全体と述語部分全体）関係を構成する直接構成素「花子」と直接構成素「每周在西餐厅吃一次日式意大利面」に分けられ、その「每周在西餐厅吃一次日式意大利面」が“状中”（連用修飾語と被修飾語）関係を構成する「每周」と「在西餐厅吃一次日式意大利面」に分けられ、「在西餐厅吃一次日式意大利面」が“状中”（連用修飾語と被修飾語）関係を構成する「在西餐厅」と「吃一次日式意大利面」に分けられ、「在西餐厅」が“介宾”（前置詞と前置詞目的語）関係を構成する「在」と「西餐厅」に分けられ、「吃一次日式意大利面」が“述宾”（述語と目的語）関係を構成する「吃一次」と「日式意大利面」に分けられ、「吃一次」が“述补”（述語と補語）関係を構成する「吃」と「一次」に分けられ、「日式意大利面」が“定中”（連体修飾語と被修飾語）関係を構成する「日式」と「意大利面」に分けられるというふうに、直接構成素分析法によって分析することができる。

この図示法で分析すれば、文字による説明に比べて、かなり分かりやすくなる。

(12) 花子 每周 在 西餐厅 吃 一次 日式 意大利面。



“□”の代わりに、下線などを用いることもある。ただし、前者を用いるケースが多いので、こうした図示法は“框式图解法”（枠式図示法）と呼ばれている。

3.3 黎錦熙の図示法

中国語学で、初めて図示法を導入して文の分析を行った著作は、黎錦熙の《新著国语文法》⁶である。黎氏の図示法は図1aのようなものである。

ここでは、具体例を通して黎氏の図示法を簡単に見ておく。まずは(13)である。(13)を図示すれば、図1bのようになる⁷。

(13) 许多 强壮的 工人, 造 一座 长的 铁 桥。 (黎 1924: 23)

たくさんの 屈強な 労働者 建造する 一本 長い 鉄の 橋

(たくさんの屈強な労働者が長い鉄橋を建造している。)

次は(14)である。(14)を図示すれば、図1cのようになる⁸。

(14) 工人 辛辛苦苦的 赶紧 修造 铁桥。 (黎 1924: 25)

労働者 骨身を惜しまず 急いで 建造する 鉄橋

(労働者たちが骨身を惜しまず、急いで鉄橋を建造している。)

黎氏の図示法は先に述べた文成分分析法の符号図示法と同じく、基本的には文の各成分を示すものであるが、直接構成素分析法の枠式図示法に近づいて、文の階層や各構成素の関係をも扱っている。

(15) 我 和 你 都 应该 多 读、多 看、而且 多 说 那些

私 と 君 みな べきだ 多く 読む 多く 見る しかも 多く 話す それら

国语文、国音字母、以及 国語会話、国語文法。 (黎 1924: 226)

国文 ピンイン 及び 国語会話 国語文法

(私と君はみな、国文、ピンイン、国語会話、及び国語文法を多く読んだり話したりしなければならない。)

⁶ 1924年初版。1959年第二十四版。1943年日本語翻訳版（題名：『黎氏支那語文法』、訳者：大阪外国語学校大陸語学研究所、出版：甲文堂書店）。

⁷ 図中の“形容附加語”は連体修飾語のことである。“主語的形容附加語”とは主語名詞の連体修飾語であり、“賓語的形容附加語”とは述語名詞の連体修飾語である。

⁸ 図中の“副詞附加語”は連用修飾語のことである。

例えば、(15)の図示(図1d)では、文全体の各成分だけではなく、“我”と“你”、“多读”と“多看”と“多说”、“国语文”と“国音字母”と“国语会话”と“国语文法”の“联合”(並立)関係という構成素の相互関係が示されている。

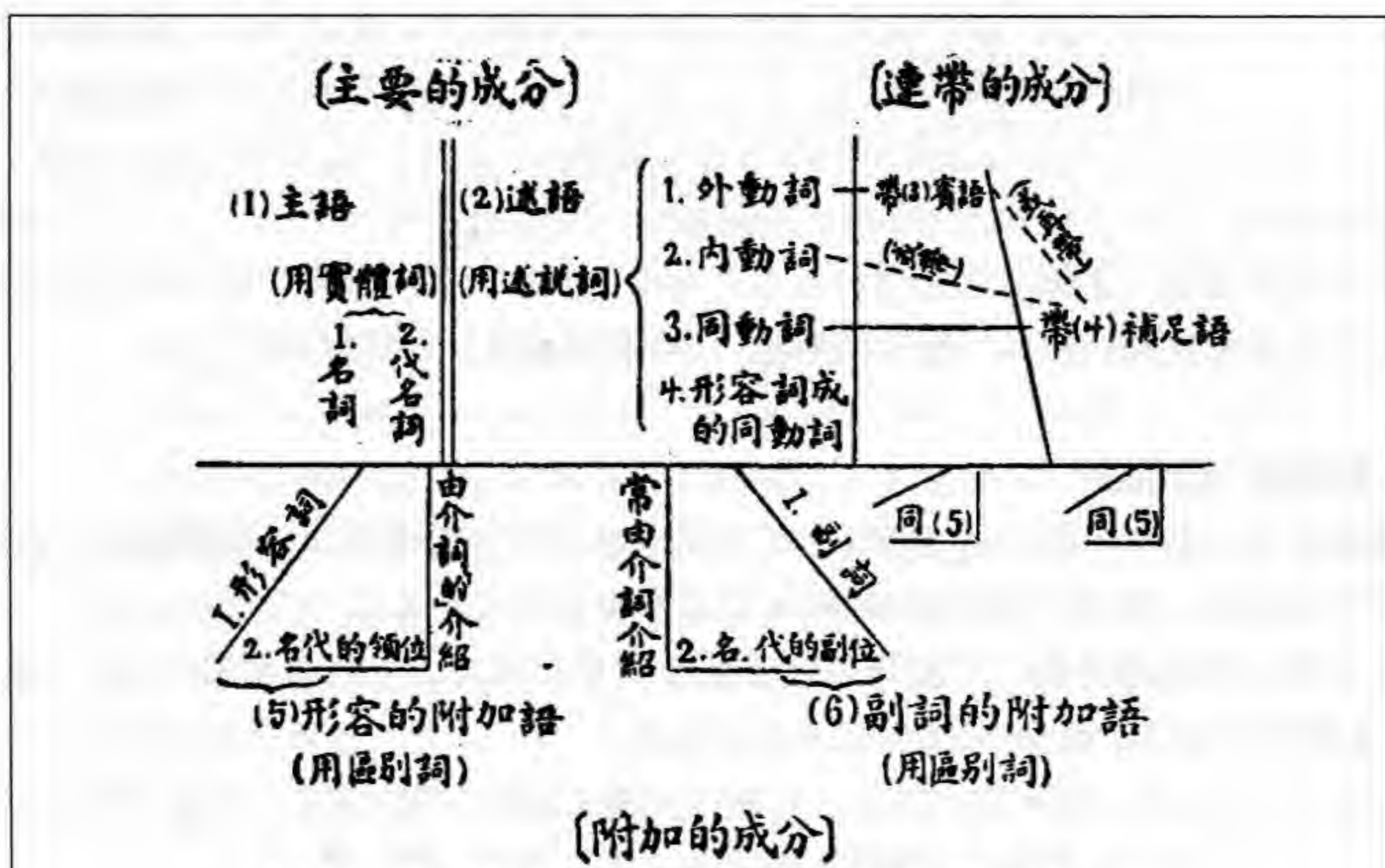


图 1a 黎氏图示法の總体的公式 (黎 1924: 27)

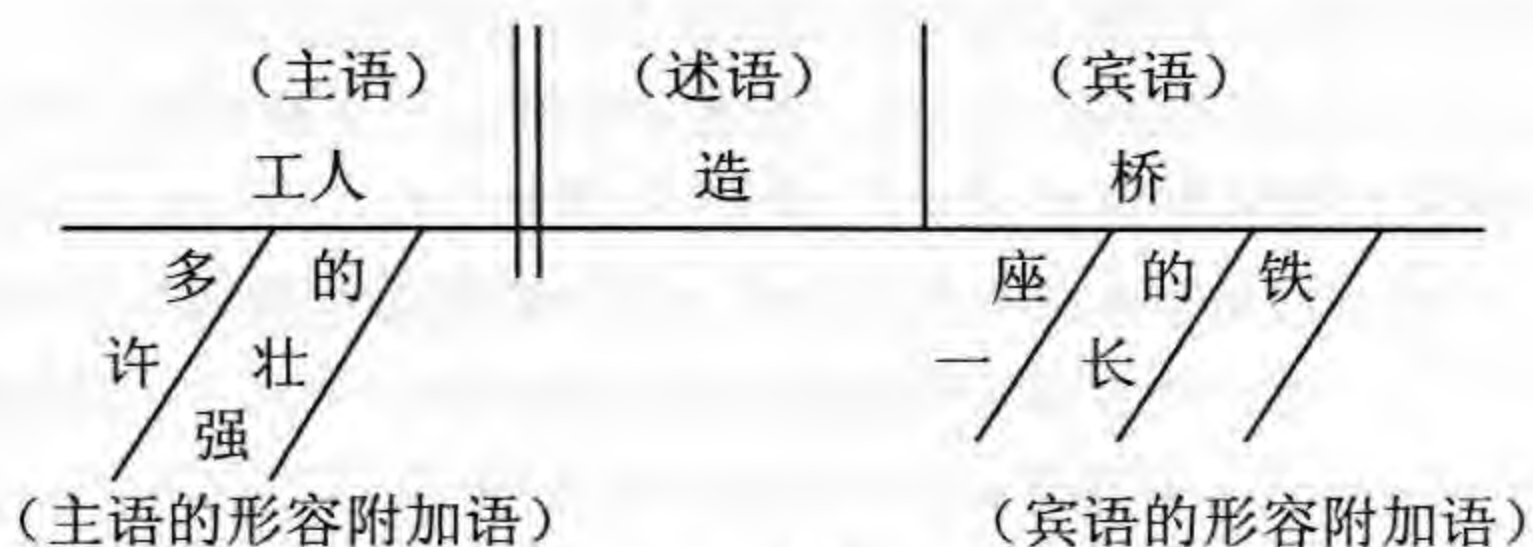


图 1b 黎氏图示法による (13) の图示 (黎 1924: 23)

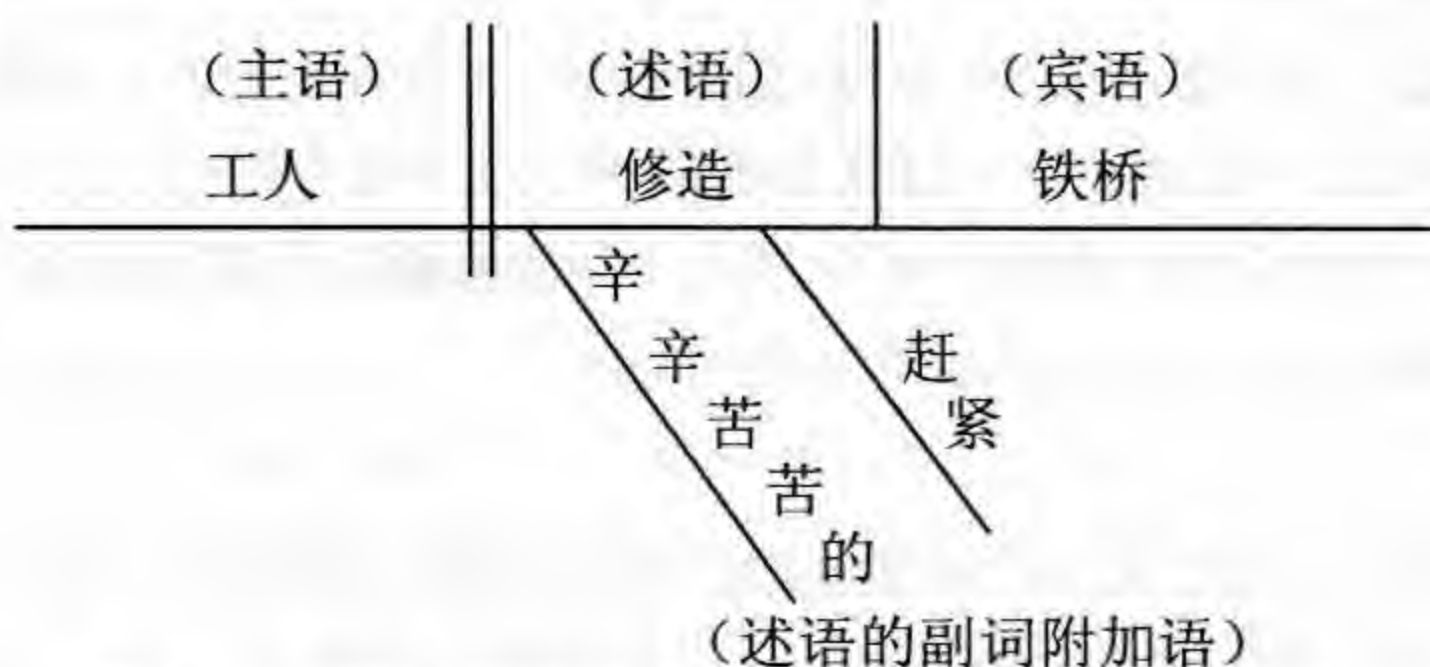


图 1c 黎氏图示法による (14) の图示 (黎 1924: 25)

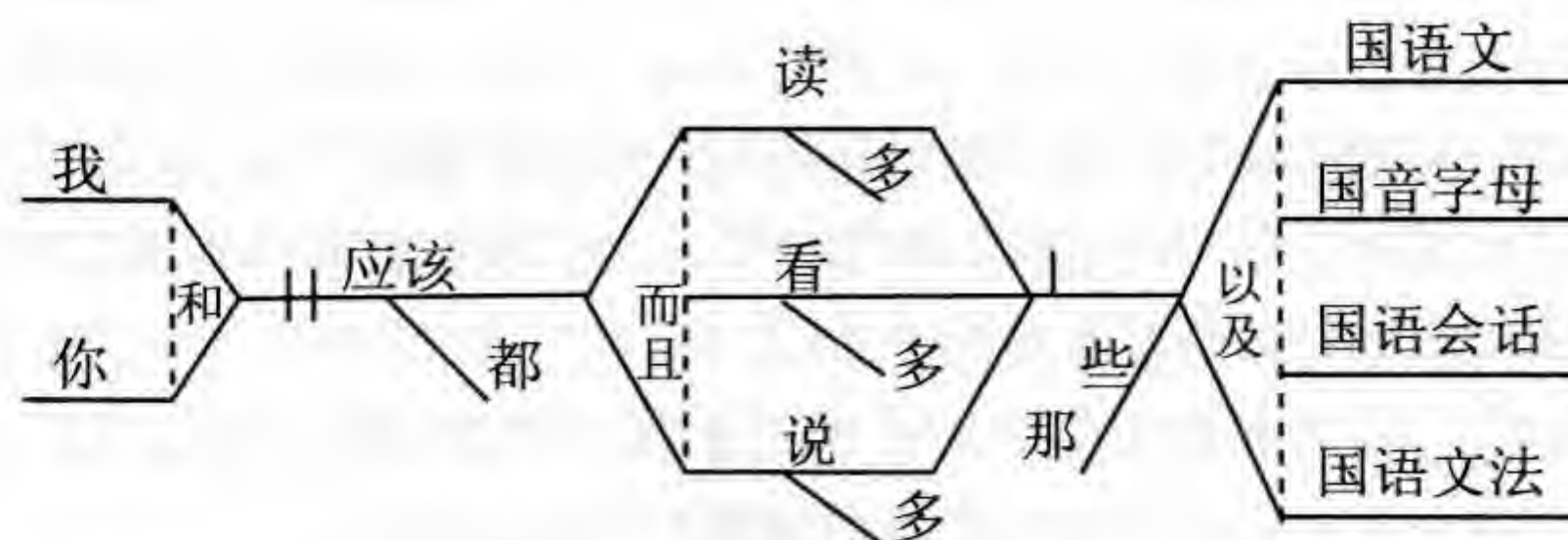


図 1d 黎氏図示法による (15) の図示 (黎 1924 : 227)

4 本研究の基本的立場、目的、考察対象

コミュニケーションの際には、話し手がことばを使って伝達しようとする情報を文の形に変換して、それを聞き手に伝える。聞き手はその文を受けて、自分の中に情報を再現して、話し手の意図を理解する。この過程では、ことばはコミュニケーションの手段であり、伝達される情報はコミュニケーションと文の基礎と内容であり、文の形式をも決めてくれており、情報を担う文はコミュニケーションの基本単位であり、形式と内容の両面からなっている。

文法研究はこうした文を主な対象としている。ただし、言語観の違いによって、文の形式の面を重視した研究(例えば、ノーム・チョムスキーの提唱した生成文法)もあり、文の内容の面を重視した研究(例えば、チャールズ・フィルモアの提唱した格文法、ロナルド・ラネカーの提唱した認知文法)もある。本研究は後者にあたる。

4.1 基本的立場と目的

ここでは、本研究の基本的立場と目的を簡単に述べる。①：本研究は説明文法的なアプローチを取る。②：文の内容、即ち文の基礎となる情報のことを重視し、情報の仕組みの解明と共に、文の形式の仕組みの解明を行う。③：深層格、表層格、文の成分、「主題－解説」構造といった文の四つのレベルを区別した上で、系統的に扱う。④：3節で取り上げた文成分分析法、直接構成素分析法、黎氏の文法、及びそれぞれの図示法は主に文の形式の面を対象とするものであると考えられる。本研究は情報の仕組みの図示をベースにした図示法を利用する。⑤：①～④で、今泉喜一教授により開発された「日本語構造伝達文法」の理論(今泉 2003, 2005, 2009、及び本稿の5節を参照)を使い、日本語構造伝達文法の中国語への適用を試みる。

4.2 考察対象

本研究の主な考察対象は中国語の“短语”(句、フレーズ)である。単語と単語が結

合して構成された句は文(述語文)の基本であり、単独で独立して文になることができ、また、他の語句と結合して文になることができる。なお、単語と単語が結合して句を構成するときの文法関係は句と他の語句が結合して文を構成するときの文法関係とほぼ同じである。つまり、句の仕組みの考察によって、文の仕組みも明らかになってくる。従って、本研究は句の考察から始まる。

具体的に言えば、主に次のようなタイプの句⁹を考察対象にする。

“联合短语”(連合句=二つ以上の単語が対等の関係にある)：

工人 农民 (労働者農民)	你 和 我 (君と僕)
労働者 農民	君 と 僕

“偏正短语”(主従句=連体修飾語と被修飾語、または連用修飾語と被修飾語の関係にある)：

新书 (新しい本)	非常 漂亮 (非常にきれいだ)
新しい 本	非常に きれいだ

“述补短语”(述補句=述語と補語の関係にある)：

洗 干净 (きれいに洗う)	走 得 快 (速く歩く)
洗う きれいに	歩く 助詞 早く

“述宾短语”(述目句=述語と目的語の関係にある)：

吃 饭 (ご飯を食べる)	去 中国 (中国に行く)
食べる ご飯	行く 中国

“主谓短语”(主述句=主語と述語の関係にある)：

他 北京人 (彼は [本籍が] 北京の人だ)	身体 健康 (体が健康だ)
彼 北京の人	体 健康だ

“连动短语”¹⁰(連述句=同じ主語を持つ述語1と述語2の関係にある)：

上 街 买 东西 (町へ買い物に行く)	打 电话 通知 他 (電話を掛けて彼に知らせる)
行く 町 買う 物	掛ける 電話 知らせる 彼

“兼语短语”(兼語句=前の述目句の目的語が後の主述句の主語を兼ねているという関係にある)：

请 他 写 信 (彼に頼んで手紙を書いてもらう)	喜欢 他 认真 (彼が誠実なので好きだ)
頼む 彼 書く 手紙	好きだ 彼 誠実だ

他のタイプの句も存在するが、上に挙げた句は構成されるときに文法関係が文の構成されるときに文法関係と同じであるため、考察の対象とする。

⁹ 句の例と日本語訳は鳥井(2008)による。

¹⁰ “连动短语”と“兼语短语”は常に句と句が結合して構成した複雑な句である。

5 日本語構造伝達文法の基礎

日本語構造伝達文法とは「日本語話者が判断の構造体をことばで（描写して）聞き手に伝達する、そのありさまを解明しようとする文法」である（今泉 2005：1）。この文法では、構造モデルと時空モデルの2種類のモデルが設定されている。この節では、日本語構造伝達文法の基礎、即ち「構造モデル」と「時空モデル」について論じる。

5.1 構造モデル

構造モデルとは「言語表現の前提となる判断の形をモデル化したもので、ことばの一つひとつの要素(形態素)がどのような関係で結び付いているのかを示すためのモデル」である（今泉 2005：2）。即ち、構造モデルは深層にある命題、及び命題に対する判断、表層にある文の仕組みを示すためのモデルであると考えられる。ここでは、構造モデルを簡単に紹介しておく。構造モデルの詳細については、今泉（2005：1-102）を参照されたい。

構造モデルは図2aのような立体図、または立体図を簡略化した平面図で表示されている。

構造モデル（平面図の場合）では、水平線が属性（動作、行為、状態等）を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線がその属性の主体（動作主、行為者、状態主体等）を示し、水平線と横倒れのT字をなして接している垂直線がその属性の成立に必須・非必須な要素（対象、道具、出発点、場所、時間等）——日本語構造伝達文法では、いずれも客体と呼ばれている——を示す。水平線と垂直線との交点または接点のところに平仮名かローマ字で書いた表層格が主体・客体と属性との意味関係（深層格）を示す。なお、属性、主体、客体等の名称は水平線と垂直線の側に書いた文字かロー

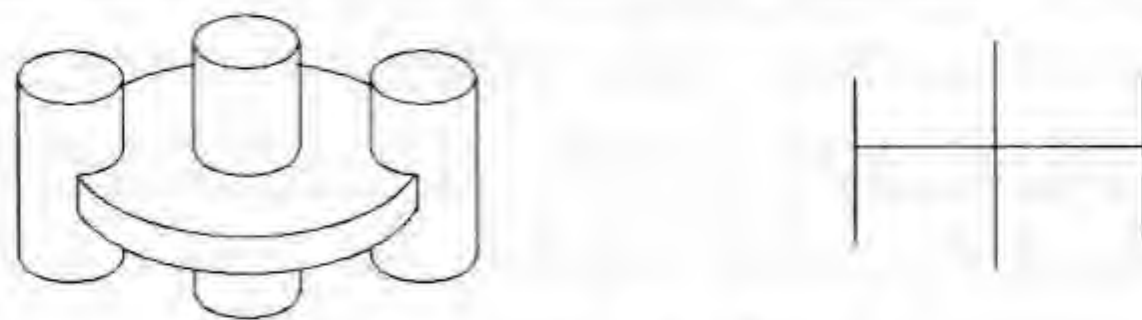


図2a 構造モデルの基本

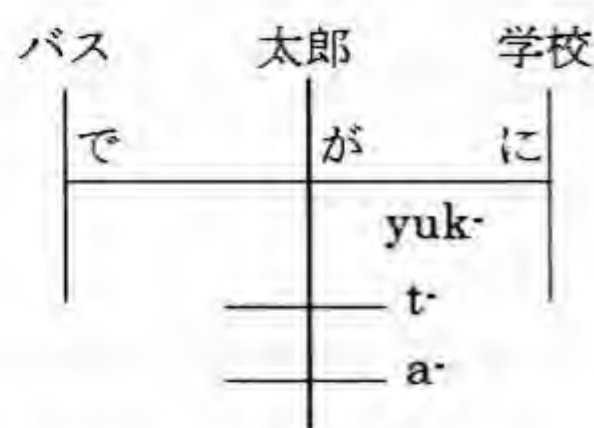


図2b (16) の構造モデル

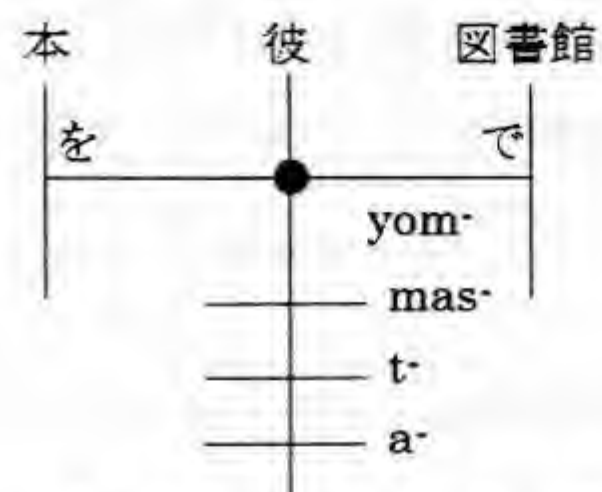


図2c (17) の構造モデル

マ字で示される。

詳しい説明は別稿に譲ることにするが、ここでは、具体例を通して構造モデルを見ておく。まずは(16)の構造モデルを見る。

(16) 太郎がバスで学校に行った。

(16)の構造モデル(図2b)では、長い水平線が属性「yuk- (行く)」を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線が主体「太郎」を示し、水平線と横倒れのT字をなして接している二本の垂直線がそれぞれ属性の成立に必須・非必須な客体「バス」と「学校」を示し、水平線と垂直線との交点または接点のところに書いた表層格「が格」、「で格」、「に格」がそれぞれ主体「太郎」と属性「yuk-」との意味関係(「動作主」)、客体「バス」と属性「yuk-」との意味関係(「道具」)、客体「学校」と属性「yuk-」との意味関係(「着点」)を示す。属性、主体、客体等の名称は水平線と垂直線の側に書いた「yuk-」「t-」「a-」「バス」「太郎」「学校」等で示される。

また、(16)の構造モデルには、二本の短い水平線がある。このような短い水平線は長い水平線の示す属性(本属性と呼んでおく)を補助し、ヴォイス、アスペクト、テンス、肯否、丁寧さ等に関わる属性(補助属性と呼んでおく)を示す。(16)の場合、二本¹¹の短い水平線は合わせてアスペクトとテンス¹²を示す。

次に(17)の構造モデルを見る。

(17) 彼は図書館で本を読みました。

(17)の構造モデル(図2c)では、長い水平線が属性「yom- (読む)」を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線が主体「彼」を示し、水平線と横倒れのT字をなして接している二本の垂直線がそれぞれ属性の成立に必須・非必須な客体「本」と「図書館」を示し、水平線と垂直線との接点のところに書いた表層格「を格」、「で格」がそれぞれ客体「本」と属性「yom-」との意味関係(「対象」)、客体「図書館」と属性「yom-」との意味関係(「場所」)を示す。属性、主体、客体等の名称は水平線と垂直線の側に書いた「yom-」「mas-」「t-」「a-」「本」「彼」「図書館」等で示される。

(16)の構造モデル(図2b)と同じように、(17)の構造モデル(図2c)には、補助属性を示す短い水平線もある。上方の一本の水平線(mas-)は丁寧さの「丁寧体」を示し、下方の二本の水平線は合わせてアスペクトとテンス¹³を示す。その上下の順序は、表層におけるそれらの補助属性を表す形態素の組み合わせの順序に従っている。また、水平線と垂直線との交点に付いた「●」は、表層においてとりたて助詞「は」の付いた主体を表す名詞「彼」が主題となることを示している。

¹¹ 日本語構造伝達文法では、「た」は「t-」(アスペクト)と「a-」(存在)に分解されるので、二本の短い水平線となる。

¹² アスペクトとテンスの具体的なタイプを示すには、時空モデルが使われる。5.2節を参照。

¹³ 注11を参照。

5.2 時空モデル

時空モデルとは「人間が現実の事態を理解しようとする際に行うであろう現実の再構成……諸対象の記号化と関係づけ……をモデル化したもの」である(今泉 2005: 2)。簡単に言えば、時空モデルは出来事(即ち事態)の時間と認識空間への位置付けを示すためのモデルで、文のアスペクト、テンス、確実性等に関わっていると考えられる。ここでは、時空モデルの基本を紹介しておく。時空モデルの詳細については、今泉(2003: 70-78, 2005: 117-160)を参照されたい。

時空モデルは図 3a のように表示されている。時空モデルでは、川の水のように、時間が未来から話者の立つ現在を経て、過去へと流れていく。川上に浮かんでいる舟のように、時間の流れに乗った出来事は未来から話者の立つ現在に近づいてきて、そばを通り過ぎて、過去へと運ばれていく。基本的に、舟が話者の右側にあれば、出来事は未来となり、舟が話者の立つところにあれば、出来事は現在となり、舟が話者の左側にあれば、出来事は過去となる。なお、出来事の舟に書いてある数字 1~6 はその出来事のアスペクトの諸局面¹⁴(1=開始、2=進行、3=完了/進行完了、4=結果状態継続、5=結果状態継続完了、6=結果記憶)を示している。

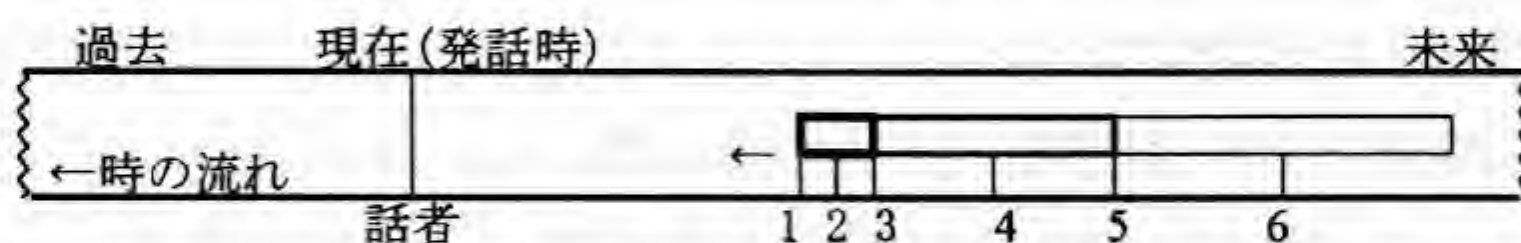


図 3a 時空モデルの一例

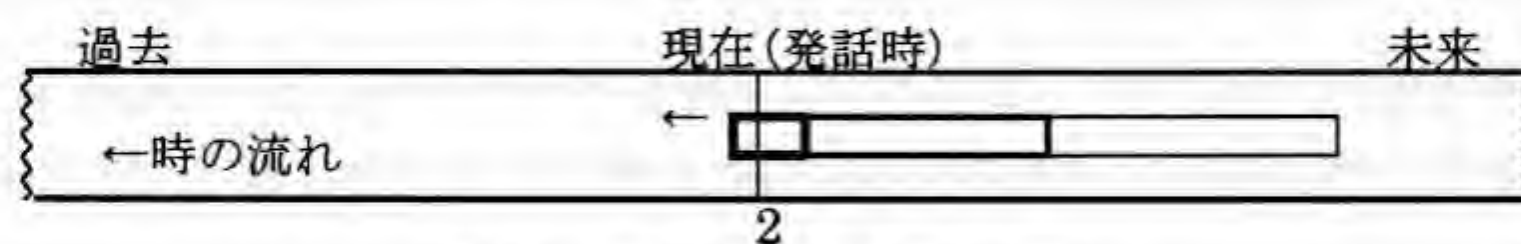


図 3b (19) の時空モデル

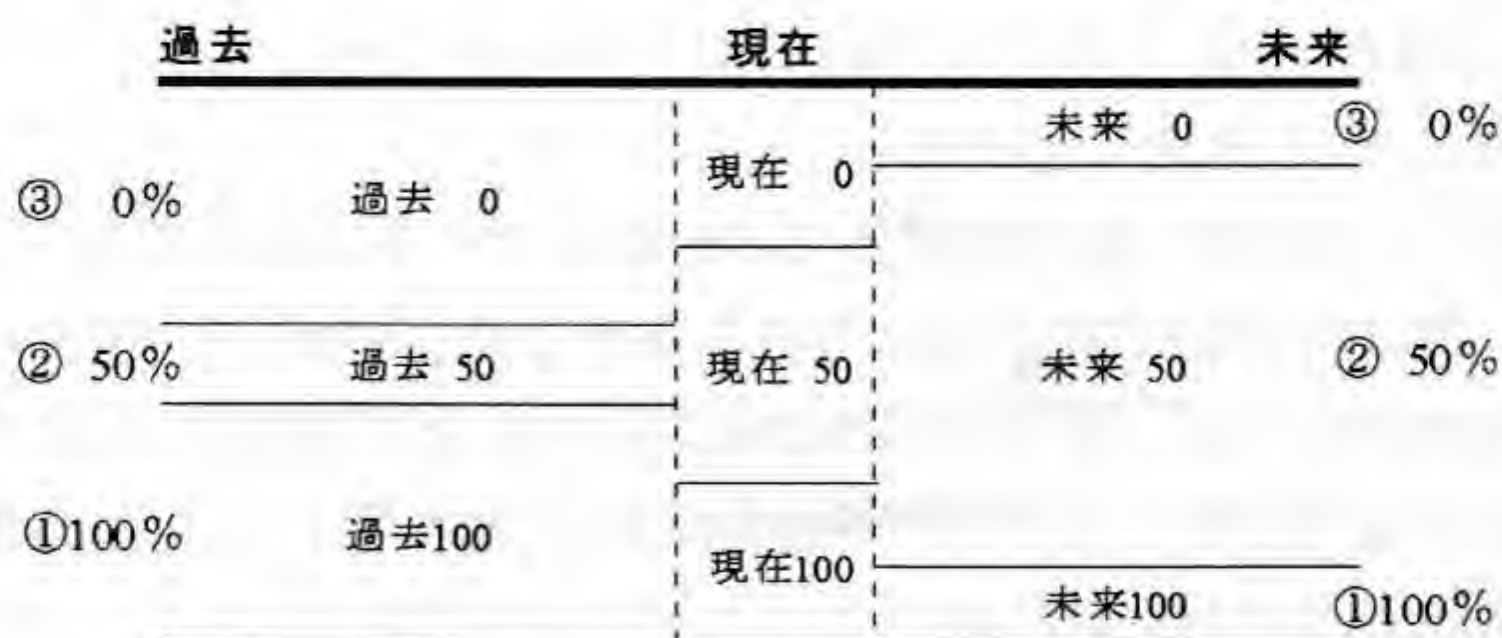


図 3c 確実性と時空モデル

¹⁴ 6種の局面を持つのは「読む」、「着る」のような典型的な「動的な出来事」である。「存在する」、「居る」のような1種か2種の局面しか持たない出来事もある。

続いて、具体例を挙げて時空モデルを見る。

(18) 明日の14時頃、彼は図書館で本を読んでいる。

(18) の出来事が未来のことであるから、図 3a はそのまま (18) の時空モデルの図示となる。この時空モデルでは、テンス「未来」は出来事の舟が話者の右側に置かれることによって、アスペクト「進行」は数字 2 によって、示される。

(19) 今、彼は図書館で本を読んでいる。

(19) の出来事が現在のことであるから、図 3a ではなく、図 3b が (19) の時空モデルの図示となる。この時空モデルでは、テンス「現在」は出来事の舟が話者の立つところに置かれることによって示され、アスペクト「進行」は数字 2 によって示される。

時間の流れに乗った出来事は我々の認識空間で生起する確実性（生起確率）によって、100% 確実に生起する出来事、50% 確実（1%～99% 確実）に生起する出来事、0% 確実に生起する出来事に分かれる。この 3 種類の確実性を、図 3c のように、川の中に三筋の流れ（①「100% 確実」の流れ、②「50% 確実」（1%～99% 確実）の流れ、③「0% 確実」の流れ）を設定することによって表示することができる。また、未来、現在、過去の区別によって、①は未来 100、現在 100、過去 100 に、②は未来 50、現在 50、過去 50 に、③は未来 0、現在 0、過去 0 に分かれる。即ち、時間の流れは時間と確実性の区別で 9 つの異なる水域に分かれる。

このように、時空モデルは時間、及び時間に関わるアスペクト、テンスだけではなく、認識空間における出来事の生起に対する確実性、及び確実性を表す形式を扱うこともできる。例えば、(18) の場合、出来事が未来のことなので、出来事の舟は話者の右側に置かれるが、100% の確実性と判断されるので、①の未来 100 の水域に置かれる。(19) の場合、出来事が現在のことなので、話者の立つところに置かれるが、100% という確実性なので、①の現在 100 の水域に置かれる。これに対して、「かもしれない」を使った (18') の場合、出来事が (18) と同じく未来のことであっても、50% という確実性になるので、舟は②の未来 50 の水域に置かれる。「かもしれない」を使った (19') の場合、出来事が (19) と同じく現在のことであっても、50% という確実性になるので舟は②の現在 50 の水域に置かれる。

(18') 明日の14時頃、彼は図書館で本を読んでいるかもしれない。

(19') 今、彼は図書館で本を読んでいるかもしれない。

ちなみに、認識空間では、未来の出来事はだいたい 50% 確実であるが、時間の流れとともに生起が実現するかしないかで 100% か 0% の確実性となることが多い。従って、流れ②は時間の流れとともに幅が狭くなる。

5.3 構造モデルと時空モデルの特徴

各種の先行研究に比べれば、日本語構造伝達文法の構造モデルと時空モデルには、次のような特徴があると考えられる。

①：構造モデルと時空モデルは今泉（2003, 2005, 2009）が独自の言語観に基づいて唱えたものである。②：構造モデルは深層にある命題と判断、表層にある文の仕組みを示すためのモデルであるが、元々深層にある情報、即ち文の内容の面に基づいて立てたモデルであると考えられる。これに対して、3節で取り上げた文成分分析法、直接構成素分析法、黎氏の文法の図示法はいずれも文の形式の面に基づいたものである。語形変化の乏しい中国語の研究にあたっては、深層にある情報、即ち文の内容の面に基づいた構造モデルがよりふさわしいであろう。③：深層格、表層格、文の成分、「主題－解説」構造といった文の四つのレベルについて見れば、文成分分析法、直接構成素分析法、黎氏の文法の図示法は主に文の成分について示していることになるが、構造モデルはいずれをも示すことができる。例えば、構造モデル全体は深層格について示し、交点または接点のところに書いた平仮名、ローマ字は深層格と表層格について示し、補助属性を示す短い水平線の上下の順序は文の成分について示し、交点または接点に付いた黒丸は「主題－解説」構造について示している。この意味で、構造モデルはより「拡張性」がある。④：従来別々に扱ってきたアスペクトとテンスは時空モデルで統合して扱うことができ、より精密に分析することができるようになった。アスペクトとテンスは切り離しては考えられないのである。こうした時空モデルはアスペクトとテンスを表す形式が乏しいとされている中国語での分析にもふさわしいと考えられる。

6 おわりに

本稿は「日本語構造伝達文法の中国語への適用」という研究の予備的考察として、文法研究に関する基本的な考え方や立場、これから行おうとする研究の目的と対象、日本語構造伝達文法の基礎等を述べた。本稿に続いて、今後はまず中国語の“主谓短语”（主述句）と“述宾短语”（述目句）を対象として研究を行っていく。

参考文献

- Blake, Barry J. (2001). *Case*. Cambridge University Press.
- 今泉喜一 (2003) 『日本語構造伝達文法 発展 A』 揺籃社
- 今泉喜一 (2005) 『日本語構造伝達文法 改訂 05 年版』 揺籃社
- 今泉喜一 (2009) 『日本語態構造の研究 - 日本語構造伝達文法・発展 B -』 晃洋書房
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版』 くろしお出版
- 鳥井克之 (2008) 『中国語教学 (教育・学習) 文法辞典』 東方書店
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房

- 渡辺実 (1971) 「文の成分」 松村明 (編) 『日本文法大辞典』 明治書院
- 陈昌来 (2002) 《二十世纪的汉语语法学》 书海出版社
- 金昌吉 (1996) 《汉语介词和介词短语》 南开大学出版社
- 黎锦熙 (1924) 《新著国语文法》 商务印书馆
- 刘月华等 (2001) 《实用现代汉语语法 (增订本)》 商务印书馆
- 张谊生 (2000) 《现代汉语虚词》 华东师范大学出版社